

Title	ユルゲン・クチンスキー フランス労働史
Sub Title	Kuczynski, Jürgen; A short history of labour conditions under industrial capitalism. France 1700 to the present day. 1946
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.4 (1952. 4) ,p.283(63)- 288(68)
JaLC DOI	10.14991/001.19520401-0063
Abstract	
Notes	紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520401-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に、わが國労働者階級の意識的生長を探る新たな社會心理學の課題が見出されるのではあるまいか。

(註1) W. Köhler; Psychologische Probleme, 1933, S. 121—123, 235—236.

(註2) 厚生省社會局保護課の國民生活實態調査における要保護世帯に關する籠山京博士の研究。近く第五回社會政策學會大會において發表される豫定。

(註3) 資本主義社會の成立の初期において、家族制度の崩壊が十分に進行せず、複合的な産業構成をもつわが國の場合、この好況及び不況による生活變動のみでその履歴の形態變化が進行するか否かには若干問題がある。ここに一般的危機の段階における強制的外力—全體戰爭、超インフレーション、重税等—の擔うひとつの役割が推定される。

(註4) 大河内一男氏著「社會政策原理」昭和二六年・一五三—一六二頁。

(註5) 即ちこの場合にも、生活關係の轉換が先ず行われてから生産關係の近代化が成熟する形態と、近代的な生産行程が外的に移入されながら、生活内容の形態變化はその後に残された問題となる形態との差異が注目されなければならぬ。

なお前者の具體的な進展については、今世紀前半のイギ

リス労働者生活に關する諸調査を詳細に紹介されたものとして、岸本英太郎氏「イギリス労働階級窮乏化の一斷面」—一九三五、六年度の労働調査を中心として—(經濟論叢六八卷六號・一一〇〇頁)参照。

一九五二・二・二七

(後記 本編の起草に當り、エンゲルの原書参照に關し東大經濟學部研究室において種々御便宜を與えられた隅谷三喜男助教に對して、ここに深い謝意を表す次第である。)

紹介

ユルゲン・クチンスキー著

『フランス労働史』

飯田 鼎

A short history of labour conditions under industrial capitalism. France 700 to the present day. 1946

- 一、序論
- 二、革命以前
- 三、フランス革命と資本主義の發展
- 四、過渡期から成熟へ
- 五、資本主義の衰退

フランス革命以前ある貴族は次のように言つたといわれる。

「フランス王國のために僧侶は祈りを捧げ貴族は血をそして平民は税を捧げる」と。このことは何よりも農民・労働者・手工業者及び商業資本家を含めてフランスの全人民が重税に苦し

ユルゲン・クチンスキー著「フランス労働史」

み、封建的な搾取に悩んでいたことを裏づけるとともに、これはまた國王を中心とする貴族僧侶などの支配階級の腐敗と墮落のあらわれでもあつた。十八世紀初頭のフランスはルイ十四世の政策の失敗により、財政は窮乏化し民衆の生活も極度におしきげられていつた。いわゆるアンシャン・レジームの下に大衆は苦惱し、演劇・繪畫・彫刻・建築などの文化も停滞していた。フランス全土の五分の二は僧侶と貴族によつて所有され、僧侶が十分の一税から得られる収入は國家の租税収入よりも多く、又貴族は裁判權を握り官職の賣買も商品取引の如く公然と行われた。

フランス革命はこのような十八世紀以來のルイ王朝の失政と人民大衆に對するはげしい壓迫がその頂點に達した結果起つた歴史上の大事件であるが、これは又フランス人民にとつて彼等の近代生活のはじまりであり、フランス資本主義のための序曲でもあつた。ユルゲン・クチンスキーはあらゆる統計資料を使つて、フランス人民の生活を資本主義の發展の中に具體的につかもうと努力して本書をまとめ上げたようである。

人民の大多數をしめ言辭に絶する支配階級の搾取をもつて、ひたすら宿命と觀念していつたフランスの農民は一七一五年には、まだ自由民ではなく農奴であつた。十八世紀の初期にあつ

六三 (二八三)

ては、いわゆる「第三身分」(The Third Estate)と呼ばれた金融業者・商工業者の数も少く、しかも彼等は次第にくづれつつあったギルド的な権力と結び、或は貴族にとり入つて自己の地位をかためようとしていた。また工場労働者や小手工業者や小貿易商などのプチ・ブル階級も少なかった。サン・シモンやボアギルベルのような急進的な思想家はいたけれども、その思想は復古的であるか、せいぜい空想的でしかなかった。従つて彼等の思想は、その當時しきりに爆発した農民の暴動とはほとんど關係がなかつたようである。

だが十八世紀の後半以来人口の増加とともに農業生産力も増大し貴族の生活程度もたかまつたが、産業貿易の進展に伴い富は金銭という形でブルジョア階級の手に入り、貴族的な支配階級の経済的な基礎は次第にゆるぎはじめた。しかもブルジョア階級の富の増大は貴族階級の収入の源泉となり、かつて農民に強いられた重い負擔は、ブルジョア階級に轉荷されようとしていた。封建制度の上に立つ貴族階級がブルジョアの富に依存すること自體・封建的な社會そのものの破滅を意味することは、いうまでもない。

ブルジョア階級と新しい生産力の代表者であつた産業資本家たちにとつて、ギルド的な支配と結びついて、古い秩序を維持し特權を守ろうとする貴族階級こそ正に反動であつた。そして崩れようとする少数者の支配を守るために絶えず國家が取締り

を強化し、政治を絶えず反人民的な方向にみちびこうとする狂氣の努力は、時代こそことなれ、現代のファシズムと共通するものがあつた。(P. 87) しかしながら、要するに金融資本家勢力の発展と、ギルド的ブルジョアに對する産業資本家の勝利は争うことができなかった。

このようにしてプチ・ブル階級をも含めてブルジョア階級が貴族階級の特權を打ち破りつつある間にも、農民の状態はまことに悲惨なものであつた。オルレアン公はメリケン粉を含まない一片のパンを國王に示しながら、次のように言つたと傳えられる。「陛下よ！ ツウレーヌの私の州では人民は一年以上も草を喰つております。人民は羊の如く草を喰ひ蠅のように死んでゆくのです」と。またルアンでは一萬二千人が乞食となり、一七二五年、一七三七年、一七三九年、一七五二年、一七六四年、一七六五年、一七六六年、一七六七年、一七六八年とパン騒動がもたらした。(P. 88) 飢饉にせまられた農民達は封建的な壓迫に耐えかねて都市に流れこんだ。そしてこれが都市に溢れる手工業者の生活をおびやかす、日雇職人を次第にプロレタリア階級に轉落させる重要な原因でもあつたらう。一七五三年三月のある新聞は、この事情を次のように興味深く物語つてくれる。「聖アントニの郊外は、彼等がその技術をよく習得していない手工業者でいっぱいである。また一方、パリは絶えず増大しつつある富の不公平によつて墮落している。これらの手

工業者によつて作られる品物は、かつての大親方達のそれよりは悪く、従つて非常に安く賣られている……」と。(P. 81)

それだけではない、革命以前においてわずかに十萬人を出でなかつたと推察されるプロレタリア階級は、何らの組織的な力を持たないため賃金は不當に安く、その上パリやリヨンでは十時間以上十八時間の長時間労働に苦しめられていたといわれる。(P. 82) すなわち労働者階級の勢力は弱く、フランス大革命のときにも彼等は比較的小さな役割を果したにすぎず、わずかにプチ・ブルジョアの補助勢力たるにすぎなかつた。

三

クチンスキーはフランス革命から一八四八年までの期間をフランス資本主義の青年期、一八七〇年までを推移の時期、一九〇〇年までを成熟期とし、更にそれ以後を衰退と激動の時期としてゐる。その區別の方法においてやや公式的な點がないでもないが、大體において正しいと言えよう。フランス革命は封建的な一切のきつなであつた僧侶貴族の経済的な地盤をうばい、ギルド的なあらゆる制限を打破したが、これはフランスのブルジョア階級の発展がナポレオンによつて強く支えられていたからでもある。資本制生産の発展がいかにめざましかつたかを次の表は示している。

工業製品年生産高

年	英國	フランス	ドイツ
一七八〇年	一七七	一四七	五〇
一八〇〇年	二三〇	一九〇	六〇
一八二〇年	二九〇	二二〇	八五

すなわちナポレオンに育てられた大ブルジョアの発展とともに、貿易は盛となり金融資本は増大し、銀行や株式會社の建設が盛んになつた。そしてこの結果は又農業にも影響を及ぼし資本主義的農業を發展せしめるとともに、他方における土地貴族の政治的な權力を増大させる結果となつた。一八一五年ナポレオン失脚後ブルボン王朝は復位したが、皇帝らがよつて立つていた地盤こそこの土地貴族であつた。従つて一八一五年から一八三〇年までの十五年間は産業資本家を含めて金融資本と土地貴族との闘争の時期であり、かくして一八三〇年の七月革命は地主的資本家に對する金融資本家の勝利を意味した。このようにして以後十八年間、一八四八年まではフランス資本主義の確立期であつたといえよう。小親方層の廣汎な没落が見られ婦人子供労働者が増大ししかも労働條件は悪化し賃金は引き下げられたのである。例えば次の數字はその當時の労働者の實質賃金の低下を示している。(但し一八〇〇年を二〇〇とする。)

一八一〇年(七〇)、一八三〇年(六一)、一八二五年(七九)、一八二六年(七九)、一八二七年(七〇)、一八二八年(六七)、

一八三九年(六二)、一八三〇年(五八)
資本主義確立の十五年間の後、いわばその成熟期に入つて資本の労働に對する搾取が限界に達するとともに、労働者もこれに耐え難くなつて來た。實質賃金は低下し、しかも労働時間は相對的に延長され、また一八三七年の危機以來失業者も増加し、不安は年とともに増大した。

實質賃金表(一九〇〇を一〇〇とする)

一七八九年(五四) 一八〇〇—〇九年(六二)
一八一〇—二九年(七〇) 一八二四—三三年(六八)
一八三三—三九年(六四) 一八四〇—五九年(五九)
L・R・ヴィレルメは次のように言つてゐる。「人は彼等が毎朝町につきそして毎晩去つてゆくのを見るにちがいない。彼等の中には泥にまみれて素足で歩く青白いやせた非常に多くの婦人がいる……。そして婦人よりも數において更に多い子供達、ほこりくさい青白い顔をして、彼等が働いてゐる間にはわかかつた織機の油でぬるぬるしているボロを身にまとつた子供達：彼等こそツイクトル・ユゴーも書いてゐる通りに、決して笑わぬ子供たち」なのである」と。

四

一八四八年の二月革命はフランス資本主義史上に一轉機を劃した。周知の如く、革命以前の絶対王制(ルイ王朝)の下にあ

つて、フランスは重商主義政策によつて商工業の發展は群を抜きイギリスをしのいでいた。アメリカ、フランス、ドイツ及びオランダなどの植民地を領有し、掠奪貿易によつて莫大な利潤をあげていたが、大革命に伴う政治的な混亂は資本主義の發展をくいどめる結果となり、英國よりおくれること約五十年にして産業革命に入つたのである。そのために重工業部門における技術上の革命、いわゆる第二次産業革命も、一八四八年頃にはじまつたと見てよからう。この頃になると労働者階級の自覺もあらわれ、組織的な反抗をうけて資本家階級は搾取の新しい方法を考へねばならなかつた。一方蒸氣機関や鐵道の發展はめざましく、一八六〇年代に至つてフランス資本主義は漸くその相對的な安定期に入り賃金も僅かづつではあつたが増加しつあつた。

實質賃金(一八五〇—一八七〇)

一八五〇年(六三) 一八六五年(七一)
一八五五年(五〇) 一八七〇年(七一)
一八六〇年(六一)

そして住宅問題のように深刻な問題は依然として存在したけれども、この時期の特徴として労働條件の悪化をくいどめようとする良心的な努力が、わづかながら政府によつて企てられたことは事實である。例えば一八七四年の児童保護法は夜間労働を禁じ、一八九二年これを改めて十二歳以下の年少者の就業を禁じて工場監督官を任命し、十二歳から十六歳までの年少労働者

に對しては十時間としたのは注目し得る。またフランスにおいては労働組合運動は一八八四年まで非合法であつて、従つてそれまでの労働運動の歴史はまことに血と涙の歴史であつた。例えばアンズイン會社の炭坑夫の一八四六年以來九回にわたる大ストライキは失敗し、労働組合に對する政府の長期間のしかもはげしい弾壓は、労働組合そのものが合法的となつた後もその發展をさまたげていた。またこの時期に見逃してはならないことは、フランス資本の海外進出と植民地よりする利潤の増大であつた。

國家收入と外國貿易(單位百萬フラン)

國家收入
一八六〇—六九年(二〇)
一八七〇—七九年(二五)
一八八〇—八九年(二五、七)
一八九〇—九九年(二七)

外國投資

一八六九年(一〇)
一八八〇年(二五)

外國投資

一八九〇年(二〇)
一九〇三年(二七—三七)

要するにこの時期においては一方において生活水準の低い植民地人口に對するフランス資本の收奪、他方非植民地諸國への資本の輸出によつて、更に本國における労働者特に家内産業における労働者の生活水準を引き下げることによつて、フランス資本主義は自らを保つことができた。

ユルゲン・クチンスキー著「フランス労働史」

五

二十世紀は資本主義の衰退の時代である。一九一四年世界大戦の勃發までの期間をとつてみても實質賃金は増加せず、労働者の生活は次第に苦しくなつていつた。そして資本主義が帝國主義的な段階に突入してもやはり動きがとれなくなり、ついに世界大戦という、文明の破壊をあらえてしなければならなくなるや、労働時間は十一時間以上に延長され、そのために労働者一人當りの生産高は驚く程増大したが労働者の致命的な災害も激増した。特に戦争の結果、鐵及び鋼鐵産業における生産力は著るしく増加し、今一九〇〇年を一〇〇とすれば、一九一五年から三三年まで一五八、一九二四年から二八年まで三二二と飛躍をとげた。このような産業における發展はひとり鋼鐵産業に限られたわけではなかつたが、いづれにせよ、フランスにおいても重工業部門における資本の獨占と集中の傾向ははげしくなつていつた。その結果として労働者階級の組織的な力が量的にも質的にも増大したことはいうまでもない。

労働組合の参加人員(一九〇〇—一九三六年)

一九〇〇年(四九二、六四七)
一九〇五年(七八一、三四四)
一九一〇年(九七七、三五〇)
一九一四年(一、〇二六、三〇二)

六七 (二八七)

一九二〇年(一、五八〇、九六七)
一九二五年(一、八四六、〇四七)
一九三六年(四、三二四、七四〇)

だがフランス資本主義といわず資本主義一般がもはや如何ともし難い危機に直面しつつあることを示したものは、一九二九年以來の世界恐慌であつた。資本主義が今やその衰退期にあることを身を以て感じたものはひとりマルクス主義者のみではない。ロシア革命の着實な發展とファシズムのかつてない猛威はフランスの資本家階級にとつて、二つの悪魔となつた。ファシズムのたたかきに脆くも敗れたフランスは、資本家的な利害のためにその傳統ある自由を捨ててナチと妥協したことがいかにフランス人民の名譽を傷つけたかは今更いふまでもない。ナチに屈從してからのフランス人民の生活は極度におしきげられ、生活費は賃金をこえるに至り労働條件は益々悪化していつた。一九四四年をもつてフランス労働史の筆をおくに當り、クチンスキーは最後に「願わくはこの悲しい數年の後、フランスの人民が苦しみから解放されてより多くの自由を、そしてより多くの繁榮と幸福とを受けんことを」と祈つてゐる。だがヒットラーが死んで七年、ようやくファシズムから解放されたはずのフランスが再軍備に狂奔する。自由諸國の一員として、果して今、より多くの自由と繁榮とそして幸福とを得てゐるであらうか。 一九五二、二、二〇

「フィリッピン群島」、「タイ」、「日本」の各地域が獨立の章として取扱われながら、その間に、「東洋の村落と西洋の都市」、「アジアの農民世界」、「生活水準」、「崩壊」、「革命」、「帝國主義」、「複合社會」、「宗教」、「新アジア」、「資本と技術」、「國家の役割」、「不足條件」、「防衛」の諸問題が章別に説明されてゐる。これらの章と、附録の「アジア貿易」、「アジアとドル」、更に序文とあと書は、アジア地域一般に共通な特殊テーマであり、それらを地域別の記述と密接な關係を保ちながら展開させてゆく著書の胸前は見事である。しかしここでは各章を始めから順序に従つて忠實に追うことを止めて、著書の見解の裡からとくに興味ある若干の點を摘出して論じることとする。

西洋文明が都市に生れたのに反し、東洋の社會的基盤は村落である。アジアはもともと農業社會であり、小土地經營と劣悪な技術は、その低生産性を餘儀なくさせながらも、自給自足の經濟社會を形成し、停滞的ではあるが一應人口と生産力の間にはバランスのとれた、その意味では幸福な農民社會であつたといえる。西洋との接觸は必然的にこの社會を根柢から揺り動かした。(p. 88) これによりアジアの農業社會は最近數十年間にその停滞性を破られ、動態的になつたが、それは生活水準の高度化をもたらさず、かえつて貧困化は益々その度を加えたので

モーリス・ジンキン「アジアと西洋」

モーリス・ジンキン
『アジアと西洋』

Zinkin, Maurice; Asia and the West. London, 1951, pp. 300.

矢内原 勝

「今世紀の歴史を概観する時、最近十年間の主要な事件はヨーロッパに起つた戦争でも變化でもなく、アジアにおける出來事である様に思われる。」本書の著者、ジンキンが自ら序文の冒頭に述べてゐるように、アジアは今や、アジア人ばかりでなく、西洋人にとつても國際政治上のキイ・ポイントとして浮び上つて來てゐる。かつて Indian Civil Service の一員であり、今なおインドで働きつつあるジンキンの眼は、したがつてインドにより多く注がれてゐるとは云いながら、東南アジア各地域に互り、西洋との接觸によりこれらの地域がいかに變化して來たか、そしていかに變化して行くか、又變化させて行かなければならぬかが、一英國人の立場から直裁に、興味深く綴られてゐる。

本書の特色の第一はその構成にあらう。「インド」、「インドの豫測」、「ビルマ」、「シナ」、「ジャバ」、「滿洲」、「マレイ」、

ある。貧困化の第一の原因は過剰人口問題である。西洋の知識はアジアの飢餓と疫病を減少させ、かつての東洋社會の人口増加に對するマルサスのチェックを除去した。資本主義發生期における巨大な人口増加に對して、西洋では移民を吸収すべき新大陸と農村過剰人口を吸収すべき工業が存在した。しかるに今日のアジアにおいては既に餘分の土地はなく、日本を除いては工場もまだ殆んど建設されてゐない。西洋流の私有財産制度の移植は地主と金貸業者の地位を有利にした。貨幣經濟と市場生産の導入は農民の負債を増加し、農民は自作より小作へ、小作より労働者へと轉落していつた。しかも土地なき民に仕事を與えるべき工業は未だ發展してゐないのである。

東洋貧困化の第二の原因は西洋によつて加えられた衝擊である。それは二つの形態において古い農民社會の安定を破壊した。即ち、西洋社會の富は、東洋に對してその低い生活水準は神の意志の結果ではなくて、自らの技術の非能率性によるものであることを示した。第二の形態は西洋が東洋に生産の新方法ばかりでなく、思考の新様式を導入したことである。自由、進歩、平等、變革というような思想は東洋人の精神生活を攪亂するに十分な要素だつたのである。

このようにして東洋社會は崩壊に瀕してゐる。その直接的表現は生活水準の低下に外ならない。これを救う唯一の道は、著者によれば西洋化の推進である。例えば、日本の反當收量が他

六九 (二八九)